

## レッシング

### 『エルンストとファルク』（後篇）

井 汲 越 次 訳

#### 第三者のまえがき

この後篇は、さきに前三篇の対話の著者が、御承知のように、当局から発表は見あわせるようにとの御内意をうけ、原稿のまま、いつでも上梓できるようにしておかれたものなのであります。

ところでこれよりさき著者がこの第四、第五篇を二、三の知人に示したところ、どうやら当人の内諾も得ずに、これの写しをとってしまったのであります。たまたまその写しが奇妙なことから編者の手にわたったのでした。編者はせっかく数々の立派な真理が日の目も見ずに埋もれてしまうのを惜しみ、内意も得ず、ここにこの稿本を版に付することに決意した次第です。

こうした貴重な書物が日の目を見て、ひろく一般に普及せんとの切望も、なかなかそのままならぬものだということになる、そうした自由をまもるには、編者はフリー・メーソンの正式会員ではないというより外にしようがないのであります。

なおまた御覧の通り、同会の或る派にたいする配慮と敬意から、もともとはすべて明記されていたものを刊行にあたって二、三、名を伏せたものもあります。

第四の対話

ファルク エルンスト！——よう！——とうとうまたやって来たね！ 湯治はもうとっくにおわったよ。

エルンスト じゃ、具合はいいんかね？ それやおめでとう。

ファルク 何だって？ 何云ってるだい。「おめでとう」だなんて、癪にさわる。

エルンスト 僕だってそうですよ。君のことが癪にさわって、癪にさわって。

ファルク 僕のことか！

エルンスト いや、つい誘惑に乗って、ひょんなことになっちまったんで。——ほら、この通り！——手を下さい——何だって——そんなに

肩をすくめて！ そんなことするもんじゃないよ。

ファルク 誘惑したって？

エルンスト まあ、そんなことでさ。そんなつもりじゃなかったかも知れないけど。

ファルク だけど責任はあるとうんだな。

エルンスト 神の人が乳と蜜の流るる地<sup>三</sup>のことを民に話しておられるのに、その地にあこがれてはいけないというのか？ またかれらを約束の

地の代りに、曠野につれて行かれたのに、神の人のことをぶつぶつ云っちゃいけないというのか？

ファルク これはこれは！ そうひどい目にあつたわけではあるまいが——それに、君がもう「わが先祖の墓守<sup>四</sup>」を勤めあげて来たってこと

は、ちゃんとわかっているよ。

エルンスト ところがそいつが「火<sup>五</sup>」に包まれたんじゃなく、煙に包まれてしまったんでさ。

ファルク じゃ、煙が消えるまで待ったがいい。そのうちに火が真赤に燃えて来るから。

エルンスト 真赤になって来ないうちに、煙にまかれてしまふそうさ。だが煙なんか平気な連中だったら、きっと悠々火にあたってますぜ。

ファルク そいつはよそのうちの台所の美味そうな煙なら、いくらでもまかれていようって連中じゃないかね。



レッシング『エルンストとファルク』（後編）

エルンスト 御存じの、あのスコットランドのフリー・メイソンリー、スコットランド騎士団とか。

ファルク ふうん、なるほどな——だけどスコットランド騎士団が誰にどうしてくれるって？

エルンスト そんなこと知るもんか！

ファルク でも君みたい、そんな新米なんか、何にも知っちゃいまいが？

エルンスト どうしてなかなか！ それあ、それ位のこと、先刻御承知できア。それ位のこと、期してましたよ！——第一の奴が錬金術をやるうっていかと思うと、第二の奴は降霊術をやるうっていうし、第三の奴は×××〔神殿騎士団<sup>七</sup>〕を再建しようっていうし——何が可笑しい——笑わば笑えだって？

ファルク 仕方がないじゃないか？

エルンスト 御機嫌をわるくするのも道理、あんな頭が変な奴らだもの。

ファルク あいつらとは二度と一緒にやれないよ。

エルンスト 何だって？

ファルク あんな夢物語だって、すべて現実に対する努力は認めるがね。あらゆるああいって邪道の中からでも、どっち向いて行ったが正道か、ちゃんと心得ているのさ。

エルンスト 錬金術<sup>八</sup>からだって？

ファルク それあ、錬金術からだってさ。実際に金<sup>きん</sup>が作れるか、作れないか、そんなことはどうでもいい。ところが、フリー・メイソンといえ、フリー・メイソンと云っただけで、余程分別のある人間でもつい慾が出て錬金術ができればと来るんだ。運よく最初に賢者の石<sup>九</sup>を得たが最後、途端にフリー・メイソンということになるんだ。——ところで、本物でも偽物でもの錬金術師についての世間話はみんなこれを実証しているから妙だよ。

エルンスト それじゃ降霊術師は？

ファルク あついだって同類さ——およそ精霊がフリー・メイソン以外の人間の声に耳を傾けるなんてあり得からざることだもの。

エルンスト 君としたことが、よくもまたそんなこと云えたものだ！——

ファルク 天地神明に誓って！——これ以上真剣な話はないんだよ。

エルンスト 滅相な！ さてこうなると、南無三、いよいよ新生×××〔神聖騎士団〕<sup>一〇</sup>ということになるんだが。

ファルク まったくこいつばかりは！

エルンスト そうれ！ 一言もないじゃないか。いかにも神聖騎士団というのは昔の話だが、錬金術師とか降霊術師なんて奴は多分その時分にはいなかったろうからな。だがフリー・メーソンが今日こうした妄想の産物なんかよか現実のものにたいして、どんな態度をとるかということになると、もっとうまいこと云うにきまつてる。

ファルク 実際こうなるとまたわれながらジレンマに陥ってしまう——ああしたものか、こうしたものか——

エルンスト いいじゃないか！ 一二つの命題のうち少くともどっちかひとつが事実だということさえわかれば！ この自称×××〔神聖騎士団〕<sup>一一</sup>か、それとも——

ファルク エルンスト！ とことん馬鹿にされないうちにこっちから云っちまおう！ 僕の良心にかけて！——あいつらが——あいつらのやっているとが正道か、それともいまさらこの正道につく望みもないほど、正道から外れたことか。

エルンスト 謹聴々々。もひとつ詳しく説明してくれないか。

ファルク そうじゃないかね？ 秘密というものは昔から極く内々の内緒ごとから生れたものさ。

エルンスト というのはどういうことか？

ファルク 前にも云ったように、フリー・メーソンの秘密<sup>一二</sup>というのは、フリー・メーソンの会員たるからには、いくら云いたいことがあっても曖<sup>おくび</sup>にも出してはいけないことになってるんだ。ところが内緒ごとというものはとかく口外されがちなのであって、なるほど嫉妬心からかくし立したり、恐怖心から口を緘<sup>くは</sup>んだり、利口に沈黙を守ったりするが、それは或る一定の時代、或る一定の国のことでしかないんだ。

エルンスト 例えば？

ファルク 例えば、さしづめ×××〔神殿騎士団〕とフリー・メーソンとの近親関係のようなものさ。そいつを一切ひとに気づかれないよう

にするのは、昔は或は必要で立派なことだったかも知れない——だが今日——今となって、この近親関係からこれ以上何のかの秘密をでっちあげようたって駄目だ。それよか、いっそのことは公然とこれを認めて、神殿騎士団のまさしくこの点が当時のフリー・メーソンにあらるといふその点だけは一応決めておかねばなるまいて。

エルンスト　じゃその点をひとつ教えてくれないかね。

ファルク　×××〔神殿騎士団〕の歴史をよよく注意して読んでみたまえ！　大丈夫ピンと来る。君だって大丈夫ずばりだ。そしてこれそいまさら君がフリー・メーソンになるまでもないという理由に外ならないのだ。

エルンスト　今のとこ、ちょっと本なんかひっくりかえす暇はないって！　でも、あたったら、あたったって、うちあけてくれないか。

ファルク　そんな証言なんかきくまでもなく、直きとわかるから。——だがまたしてもジレンマに舞戻りだて！　どっちをとるかは、ひとえにこの点にかかっているんだが——いま×××〔神殿騎士団〕をかかえこんだフリー・メーソンの会員がみんな正しくこの点を見、かつ感じているのなら——かれらも幸いなる哉！、世の中も幸なる哉！　かれらのすることなすこと、すべてに祝福あれ！　かれらのなさざること、すべてに祝福あれ——だが、この点をよく認識もせず、感じもせず、ただ似たり寄ったりなことでまどわされ、××〔神殿〕で働いてるフリー・メーソンにひきずられて×××〔神殿騎士団〕に入ったにすぎないとか、ただあの——〔白地のマント〕の——〔赤十字〕<sup>四</sup>が気に入っただけとか、さては身入のいい——〔騎士会領荘園〕やぼろい職禄を仲間同士で山分けしてやろうというだけのことなら。——

さらば天よ、大いに憫れみを垂れ、われわれの笑いをとめて下さい！

エルンスト　どうだい！　お堅いようだが、なかなかどうして話せそうじゃないか。

ファルク　どういたしまして！　——お言葉は痛み入ったが、もともと水のように冷い男なんで。

エルンスト　ところで二つの場合のうち、先生方の場合はどっちでしょうか？

ファルク　後の方じゃないかな。——こちらの思い違いじゃなけあいいんだが！　大体、第一の場合だとすれば、あんな妙な考えが生れ来るわけがないじゃないがな。——×××〔神殿騎士団〕を再建しようなんて！　————〔神殿騎士団〕がフリー・メーソンだったという長所なんてものは、もうありゃしない。少くともヨーロッパはとうの昔にその域を脱しているんで、そんな特別の後盾なんかいりゃしないん

だ。いまさらどうしてくれようってんか？ 丸々した海綿一五になって、またお偉方に搾られようっていうんか？ —— だけど、こんなことを誰に向ってたずねようっていうんか？ また誰にはむかってたずねるんか？ —— いつか君も僕にそう云ったな—— よくもまた云ってくれたよ—— やれ錬金術の、やれ降霊術の、やれ×××「神殿騎士団」のと、油を売り歩いてるのは教団の新米どもとは違うのか？ 子供たちとは違うのか？ 無闇やたらに子供たちを虐待している先生方とは違うのかと。—— だが子供たちは大人になる—— 放ったまえ！ —— もうたぐさんだ、いつかも云ったように、結構僕にはその玩具に大人たちが振りまわす武器が見えるんだ。

エルンスト もともと、君、面白くないのは、そんな子供だましのことでもないんだ。裏には真面目なことがあるなんて思いもせず、つい見逃していたが—— 例えばあの鯨の仔二六に向って抛りこんだ空樽みたいなものだ！ —— ところが、いま僕を苦しめているのは、それなんだ。つまり、何処へ行っても此処へ行っても、見るもの聞くもの、この子供だましみたいなことばかしなんだ。君がこの心に期待を呼び起してくれたよ。うなことなんか、一人も知りたがっちゃいない。手当り次第、これという奴に僕はそう云っているんだ。だけど誰一人賛成してくれるものもあるでなし、何処へ行っても此処に行ってもみんなかたく口を緘して語らずだ。

ファルク といことは——

エルンスト 君が会規と云われるあの平等ということにしてもだよ。それあ、この平等ということこそ、僕の魂を思いもよらぬ希望でいっぱいにしてくれたもんだ。でもこいつは、第三者の利益に反して市民的制約を浸害するようなことなく、むしろそうしたもの一切を超越して考えることのできる人間たちの社会になってはじめて呼吸できるようになるものなんで——

ファルク そうすると？

エルンスト 現にいまそんなものがここにあるだろうか？ 昔はあったろうが—— さあ、ひとつ、教養あるユダヤ人を一人呼んでみたまえ。「はい」と云ってるぜ。「ユダヤ人ですって？ それや、むしろフリー・メーンですが、少くともクリスチャンに相違ございません。ど、この、どんなクリスチャンだろうと、そんなことは、お、か、ま、い、な、い、で、す。も、っ、と、も、宗、教、の、別、な、く、と、い、っ、て、も、神、聖、ロ、ー、マ、帝、国、領、内、公、認、の、三、つ、の、宗、教、の、別、な、く」というだけの話ですがね、—— 君だっってそうじゃないかね？

ファルク さあ、どうかなア。

エルンスト　じゃ、ひとつ仕事場で働きながらも十分余暇のある正直靴屋のおやじを、（ヤーコプ・ベーマなり、ハンス・ザックス一八みたいな男でも）呼んでみたまえ！「はい」と云ってるぜ。「靴屋でさ！　もちろん靴屋ですとも！」——じゃ、今度はひとつ、実直な、年期のはいった、しっかりやの小使を呼び出してくれないか！「はい」といってるぜ。「むろん、われとわが着物の色も選り好みできぬ手合ですが——お互同士とてもいい社会でして」——

ファルク　どこが一体そんなにいい社会なんだね？

エルンスト　どっこいこう、世の中が退儀になるのはいいい社会なれば、こ、そだなんて滅相もない話じゃないか。公爵だ、伯爵だ、フォン某だ、将校だ、なんとかかんとかの委員だ、商人だ、芸術家だといって——勿論ロッジ内じゃ身分の上下なくみんなお互に一緒くたになってわいわい云っていますが——実際はみんなお互に類一九を以て集ったものにすぎないんで、つまり退屈しのぎと仕事の必要上境涯を一つにしているところからできたものなんで。

ファルク　僕の時代はそんなもんじゃなかったがな——やっぱりそんなものだったかなあ！——何か知らんが、見当はつくよ——何しろすっぱり御無沙汰してて、ロッジ二〇とは、どんな種類のものとも、もうすっぱり縁がきれてるんでね——今後、或る期間、ロッジに入ることを禁ずというのと、フリー・メーソンから閉出しを喰二一つてるのは、別のことだかららな。

エルンスト　どうしてさ？

ファルク　だって、ロッジとフリー・メーソンとの関係は、教会対信仰のようなものだ。教会の表面的儀礼なんかから信者の信仰なんて、どうしてどうして、とても割出せるものじゃない。もしこれが本当の信仰と両立できたら、それこそ奇蹟だといったような或る種の表面的作法さえできているんだからな。およそこの両者がうまく行ったようなためしなんかないんで、お互に共倒れというのが、歴史の教えるところだよ。そうなるんじゃないかね、やっぱり——

エルンスト　ええ？

ファルク　要するに！　話にきくような、今日行われているロッジ制度なんてものは、とても合点ならんだ。金庫をもつ。資本をつくる。その資本をふやす。そいつを一銭でも高利にまわす。やたらと買占めをやる。王侯君主から何のかのと特権をせしめる。これの威信と威力と

をばおのれの宗とする会規とは違った他派の会員たちを抑圧するために利用する——こんなことがなが続きたら！——下手な予言なんかしない方がましだて！

エルンスト それじゃ！ 一体どうなるってことかね？ まさかいまどき国家がそんな真似はやれまい。おまけに、現在国家の法律をつくったり、処理してる方々には、御自身すでにフリー・メーソンになってるものがあんまり多いんで——

ファルク よろしい！ それじゃ、かれらはもう国家のことなんか我関せずということになったら、どうだね、そうした制度がかれら自身にどんな影響を及ぼすことになるか？ かって自ら解放されんとしてた方向に、また逆戻りすることになっちまうんじゃないかね？ かってかくあれかしと望んでいたことにならずにしまいになっちまうんじゃないかね？ ——さあ、僕の云うことがすっかりわかってくれたかな——

エルンスト 先を続けてくれ！

ファルク もっとも——それじゃ——何ごとも永続するものなんかないんで——多分、これこそまさしくフリー・メーソンなるものの現在の方式全体を御破算にせんがために選ばれた天の配剤かも知れないんだ——

エルンスト フリー・メーソンなるものの方式だって？ どうしてそんな云い方をするんだ？ 方式だなんて？

ファルク さあ！ 方式というか、枠というか、つまり表現の仕方だな。

エルンスト どうもまだよくわからない——

ファルク フリー・メーソンリーなるものが必ずしもフリー・メーソンリーの役をつとめて来たとは、君だって思っちゃいまい？

エルンスト それあまたどうということかね？ フリー・メーソンリーなるもの必ずしもフリー・メーソンリーなる役をつとめて来たとはかぎらないって？

ファルク 言葉をかえて云おう！ フリー・メーソンなるものが常にフリー・メーソンという名を称していたと云うんかね？ ——おやおや！——もう午すぎだ——もう客がお出だ！ ——御一緒にませんか？

エルンスト そのつもりじゃなかったけど、御相伴にあずかって、たんまりお話をきかせてもらおうか。

ファルク 食事中は、どうか、あんまり喋舌らないで。

第五の対話

エルンスト やれやれ、やっと出て行った！——おお、あのお喋りども！——それにしても、あの顎のところには疣のある男——名前なんかどうでもいいや——あいつがフリー・メーソンだってこと、君、気がついたか、つかなかったか、どうです？ 盛んに卓をたたいていたが。

ファルク ようく拝聴してたよ。それどころか、話の中にきくと君の気がつかなかったことまで気がついてたよ。——あいつら、アメリカ人のためにヨーロッパで闘っている連中だ——

エルンスト それなら大出来じゃないですか。

ファルク それがまた途方もない、議会のことをロッジと仰せられるんで。しまいにはフリー・メーソンが武器をひっさげてあちらに行き、かれらの国を建ててんだっていうんだ。

エルンスト …… やっぱりそんな夢想家もいるんかね？

ファルク それやいるとも。

エルンスト でもあいつの何処からそんな呓言たもとよが出て来るんかね。

ファルク 舌三寸からさね、いずれは君にもはっきりわかかって来るだろうよ。

エルンスト 南無三！ フリー・メーソンの奴らに一杯喰わされたぞ！——

ファルク 心配ちゃんすな、フリー・メーソンは悠々日の出を待ってるんだ。だが蠟燭の火は何とかして、なるべく燃やしとくん——火を消してしまうことと、消してしまつてから燃え残りの蠟燭にまた火をつけたものか、それとも別の蠟燭とさしかえたものか決めること。こいつはフリー・メーソンの仕事じゃないんだ。

エルンスト 同感——「血を流すということは、何も血に値するっていうことじゃない」<sup>四</sup>からな。

ファルク 名言だ！——さあ、ききたいことがあったら何とでも大きくいい。きっとお答えするから。

エルンスト こうやってきていたらどこまで行ってもきりがなさそうだ。

ファルク 何から切出していいかわからないだけだよ。

エルンスト お互い話が切れたときは、君の云うことがわかったときか？ それともわからなかったときか、どっちだね？——いつだったか、フリー・メーソンリーというものは常に存在していたものだ、と云われたが、そのとき僕はそれをこう理解したんだ、そのフリー・メーソン制度の本質のみならず、その会憲だって古い古い大昔から由来しているものだ。

ファルク それが双方事情が同じだったらなあ！ 本質上から云って、フリー・メーソンは市民社会と同じく古いものだ。それゝ双方もちつもたれつということではなれやこそ成立し得たのさ——市民社会がまさかフリー・メーソンの申し子だってことじゃあるまいって！ それゝ焦点に焰が燃え上ったのは、太陽から放射されたものだが。

エルンスト まあ、そんなもんだらうな——

ファルク 母親と娘でも、姉妹同士ということでもいい。両者の運命はいつも互に相影響しあって来てる。市民社会の存するところ、そこには必ずフリー・メーソンリーが存していたし、またその逆でもあった。フリー・メーソンリーと並んで開花したればこそ、市民社会というものが健康な国力強い憲法の最も確実なしるしなり得たのだった。もしそれが、欲すると欲せざると、内々受入れざるを得ないが、表面上はどうしても受入れたくないというのなら、それはいま以て間違ひなく弱体な弱々しい国家のしるしだ。

エルンスト すると、それは——フリー・メーソンのことを云ってるんだな！

ファルク その通り！——抑々フリー・メーソンの基礎として居るところは、とかく民法の規定に墮してしまふ、外面的な団体じゃなく、同志の人々の連帯責任なんだから。

エルンスト でも誰がこれに命令を下すんか？

ファルク それゝ何と云ってもフリー・メーソンなんかより市民社会の方が強力なんで、いついかなる場合でもこっちから市民社会にそり、あわせ、融通を働かせて行くより外仕方がない。従って市民社会が多種多様なものだっただけに、フリー・メーソンリーの方でも是が非でも

多種多様な形式をとらざるを得なかったわけだが、ただ新しい形式には自然またそれぞれ新しい名がついてきたものだ。ところで国家というものを事細かに評価する基準となつて来ていたそうした支配的な国家観、考え方よりも、フリー・メーソンの名前の方が古いなんて、君、どうして考えられよう？

エルンスト　じゃその支配的な考え方とはどんなことなのか？

ファルク　それはどこまでも君自身の研究にまつとして——僕としてはわれわれが秘密結社の一員たることを示すフリー・メーソンという名前は今世紀の初頭以前には決して聞かれなかったと云えば、たくさんだ。それ以前の時代に活字になった本はたしかに一冊もない。だが古い古文書に出てるから御覧に入れるという人がいらっしやるなら、お目にかかりたいもんだ。

エルンスト　というのは、ドイツ語の名前がだな。

ファルク　いや、いや！　もともと原語でもフリー・メーソンだし、何語でもみなこれと同系の訳語だ。

エルンスト　まさかあ！　——よく考えてくれ——今世紀の初頭以前には活字になつて本は一冊も出てないって？　一冊も出てないって？

ファルク　うん、一冊も。

エルンスト　それにしても僕自身——

ファルク　そうかね——それあ何か反故ッ屑がお眼にとまったんじゃないかね？　相変らず盛んに撒きちらかされているもの。

エルンスト　でもその出所まで——

ファルク　『ロンディノポリス』<sup>五</sup>ってやつだろう？　そうじゃないかね？　——反故ッ屑さね！

エルンスト　それからヘンリー六世時代の国会公文書<sup>六</sup>だけ？

ファルク　反故ッ屑さ！

エルンスト　それからスウェーデン国王カール十一世がゴテンブルクのロッジに与えられた大特許状<sup>七</sup>だが？

ファルク　反故ッ屑さ！

エルンスト　それからロック？

ファルク　ロックといっても、何処の？

エルンスト　あの哲学者の——ペンブルック伯宛の手紙なんだよ、ヘンリー六世直筆の署名入りの或る聴取書に関する彼の注釈のことかい？

ファルク　そいつはまったく掘出し物に違いない。知らないがなあ。——それにしてもヘンリー六世だって？　——反故ッ屑だったら！　反故ッ屑にきまったら！

エルンスト　どうあってもか？

ファルク　牽強附会の快文書偽書のことを体裁よく、何と云ってるか御存知かね？

エルンスト　でも、よくもまあ、そんなながいこと、世間の眼をごまかし通せたもんじゃないか？

ファルク　わけないさ！　頭のいい奴がいなすぎるんだ。どんないんちきだって、出来たて早々そう反対はできないようにできてるんだよ。

ただ、こういったものには時効がないだけ有難い。——勿論、公衆の前でいんちきはやらないに如くはない。——というのは、あんまり馬鹿気きったことは、はじめからんで馬鹿気てて、ことさら反対するものもないので、どうかするといつの間にか非常に厳肅な神聖なものみたいな外観を呈することがある。だからもうかれこれ千年以上こう云われてるじゃないか——「本当のことでないのに、そのまま世の中に発表してしまつて差支ないか？　当時、その道の玄人でさえ反対しなかったものを、今さら反対しようというのか？」

エルンスト　おお、歴史！　おお、歴史！　汝は何ものぞや？

ファルク　アンダースンの根も葉もないちやらんぼらん<sup>一〇</sup>とくると、フリー・メーソンの歴史を建築史にすりかえてしまつて、あんなものが平気で罷り通っているんだからなあ……むかし昔の大昔のことならそれでもよかろう——それにそのいんちき手品の種も知れてらあ——それだのに、今さらこの泥沼みたいな土台に建築を続けたり、真面目な人に口頭で申立てるのもおこがましいことを絞切型に主張したり、いい加減やめにしてもらいたいような冗談をとばしたり、毒にも薬にもならん市民的利益とやらのために pillory (獄門—訳者注) 覚悟の fargery (偽物造り—訳者注) をやってのけ——

エルンスト　この場合は洒落冗談ですむだろうが、もしこれが事実だとすれば？　会の秘密は昔から専ら同名の職人組合の間で守られて来たというが、もしこれが事実だとすれば？

ファルク 事実だとすればだと？

エルンスト じゃ、事実じゃないというのか？ ——でもそうでもなければ、何もそんな職人組合のシンボルなんか、借りて来ないでもすみそ  
うなののに？ 何故またよその組合ではなく、特にこの職人組合から借りて来たのか？

ファルク こいつはまたなかなか厄介な御質問だ。

エルンスト それはそれで何かまた理由があのか？

ファルク それもあるとも。

エルンスト そうかね？ でもあの俗説とは違った別の理由が？

ファルク うん、全く別の。

エルンスト そいつをあてろって？ それともこちらからきいてもいいかね？

ファルク 突拍子もない質問が出されても、あてるのはわけなかったかも知れないぜ。

エルンスト 突拍子もない質問というと？

ファルク というのは、今日のフリー・メーションリーは必ずしも昔はフリー・メーションリーと云ってたものではないと云ったが、何よりも白  
然で手近かな質問と云えば、——

エルンスト 他に何と云ってたかたずねることだね？ ——よろしい——じゃ、そうたずねるとしよう。

ファルク フリー・メーションリーがフリー・メーションリーと称する以前は、何と云ってたって？ ——*Massone* だ——<sup>一四</sup>

エルンスト それあ云うまでもない！ 英語で「メーションリー」さ——

ファルク 英語で *Masonry* じゃなく、*Masonry* だ。——*Mason* すなわち左官じゃなく、*Mase* すなわち机、テーブルから来てるんだよ。

エルンスト *Mase* すなわちテーブルだって？ 何語で？

ファルク アングロ・サクソン人の言葉だが、そればかりじゃない、ゴート人やフランス人の言葉だってそうだ。だから原語はドイツ語なん  
で、いまでもいるんな派生語が行われている。現にいつき頃まで *Maskopje* *Masledig* *Masgenosse* 一五 というように、つかわれていたもの

だ。マッソネという言葉にしたって、ルター時代<sup>一六</sup>には盛んに使われていた。ただ少々意味がわるくなっていただけだ。エルンスト そのいい意味も、そのわるくなった意味も知らないんだが。

ファルク だが重大事件が起きたときでもテーブルに額を集めて考えたわれわれの祖先の風習は知ってよう？ —— <sup>一七</sup>Mase とはすなわちテーブルのことであり、<sup>一八</sup>Masnei とはうちとけた会食のことだ。ところがこのごく内輪同士のうちとけた会食ということから、どうして大酒盛りということになったか——アグリコーラも <sup>一九</sup>Masnei という言葉をこの意味合でつかっているが——こいつはすぐ察しがっこう。

エルンスト 少し以前はこの方がロ、ツジ<sup>一八</sup>という名よかよく使われていたんじゃないかな？

ファルク だが、以前、マソネイが一部まだこんなふうになっていず一般の考えもこんなふうになってないうちは、それだけ信望も大きかった。ドイツでは、大小を問わず、宮廷では自分たちのマソネイをもたないとはなかった位だ。古い歌謡本や史書がその証人だ。領主のお城や宮殿に附属乃至隣接した独自の建物はこのマソネイからとった名前がつけられていたものだが、近頃いい加減根拠のない説明がこれに下されている——ところで円卓騎士は同勢みんなこれから出ているんで、この円卓騎士会<sup>一九</sup>こそすべてのマソネイ中、最初にして最古のものだと云えば、かれらの名譽のためにそれ以上云う必要はあるまい。

エルンスト 円卓騎士？ これはまたえらく大時代な昔話になったものだ——

ファルク アーサー大王のことというのと、えらく大時代な話のようだが、円卓騎士<sup>二〇</sup>といったてそう大時代な話じゃないぜ。

エルンスト だけどアーサーがその創設者ってことじゃないか？

ファルク そんなことあるもんかな！ 話の筋からしてそんなものじゃない——すでにマソネイという名前からして想像がつくように、アーサーにしろ彼の父王にしろ、みなアングロ・サクソンから来たものだ。そしてそのアングロ・サクソンにしろ、祖先の地にもこってない風習をわざわざイギリスに持って行くなんてことはあれおしない。そんなこと、わかりきった話じゃないか？ この大きな市民社会の内外に小さな内輪な結社をつくりたがる傾向はドイツ民族独得のことで、当時のドイツ民族についても見られたことなのだ。

エルンスト と、仰しゃるのは？ ——

ファルク いまざっき、そう精確じゃないけど、ついちょっと口を滑らしたことが、そのことについては今度一緒に町へ行って蔵書を調べ

た上、ちゃんと紙に認めておくことにするから。——今日のところは、大事件の噂話をはじめてきくときのように、僕の話をきいてくれ！  
好奇心を満足さすというより、ますます唆るばかりだが。

エルンスト さっきの話、あのままどこでどうなってたっけ？

ファルク マソネイというのは、サクソン人がイギリスに移植したドイツの風習だったところだ。その中、どいつが *Mase Thanes* だったかということになると、学者間でも一致していないんだ。この新しい土地に深く根を下し政変のうち続くなかにずっと根を張って、その時々立派に花を咲かせるようになったのは、どこから見てもこのマソネイの貴族だった。殊に *×××* のマソネイは十二、十三世紀にはえらく大評判になった。例えば或る *×××* マソネイの如き、教団の解散にもかかわらず、十七世紀の末までロンドンのどまんなかに頑張っていたものだ——ところがこの時代から勿論史料として抛るべき文書もない時代が始まっている。だが何しろ周到に保存された伝承なので、これだけ事実の心証があがってればまさにその欠を補うようになるよ。

エルンスト でもその伝承を文書に誌してちゃんとした史実ということにするのに、どんな支障があるのか？

ファルク 支障が？ 支障なんかあれじゃない！ それよりみんな寄ってたかって、そんなふうにしちまってるんだ——少くとも僕は、君や君と同じ立場にあるみんなに、こんなことこれ以上秘密にすべきじゃないという感じだ。いや、それが義務と感じている位だ。

エルンスト そうするとこれあ！——こいつはえらいことになったぞ。

ファルク ところでその *×××* マソネイなるものは、前世紀の末にはまだロンドンにあったことはあったが、ひっそりかんとしていたもので、会館は当時新築成ったばかりの聖ポール教会から程遠からぬところにあった。さてこの世界第二の教会の建築師だったのが——

エルンスト クリストファ・レン——

ファルク そして君が今日の全フリ・メーソンリーの設立者にあげていた——

エルンスト 御本人が？

ファルク 要するにだ！ レンと云えば、近所に集っていた古い古い大昔、マソネイの集っていた聖ポール教会の建築師で、同教会の工事中三十余年ますます足繁くこのマソネイに出入していた人だ。

エルンスト どうやら僕の誤解だっと思って思い出して来たよ。

ファルク それだけのことさね！ マソネイという言葉の本当の意味は、イギリス国民の間には忘却され、失われちゃったのだ——メーソニーといっても、こうした重要建築物の近所にあつたものだし、その建物の建築師がせつせと顔を出したので、何かややこしいことがもちあがると、相談に出かけたのは建築専門家の集りであるこのメーソニーしかなかつたのじゃなからうか？ ——

エルンスト ごもつとも至極だ！

ファルク ところが、ああいった教会のあつた工事を続行する段になると、全ロンドンの関心があつまったものだ。直接当人から情報を得ようと、多少とも建築の心得があると思つてる連中がわれもわれもと競つてこの俗に謂うところのメーソニーに入会しようとしたんだが——駄目だった——クリストファ・レンといえば、御承知の通り、建築家として名前が売れてるばかりじゃない。御承知の通り、実に発明な活動家だ。或る学会設立の立案に力をかけたこともあつたが、こいつは思弁的な真理をさらにひろく公益化すると同時に、さらに市民生活に有益なものとしたのだ。ところが今度は突然これとは対照的な会のこと浮んだのだ。というのは、市民生活の実際面から思弁に向上しようというんだから。「前の場合は」と、こう考えたんだな、「真実なものうち、どういうことが実用性があるかと研究することだが、後の場合研究されることは、実用性あるものうちどういうことが真実かということなのだ。いまもし自分がいくらかでもメーソニーの規約を公開してしまつたら、どうか？ 公開されないということになってるもの、メーソニーという言葉の中にはそういうものがあることをいま以て強情に信じているが、そういうものをいまもし自分がこの職人組合の符牒とかシンボルにこっそり入れてしまつたら、どうか？ このメーソニーなるものを拡大して、多数の人がこれに加入できるようなフリー・メーソニーとしたら、どうか？」——と、こうレンは考え、こうしてフリー・メーソニーなるものができたんだというんだが——エルンスト、どうだな？

エルンスト 目眩めまいしたみたいだ。

ファルク 少々あかりがさしたか？

エルンスト 少々だつて……一度に多すぎる位だよ。

ファルク じゃ、これでわかつたつて——

レッシング『エルンストとファルク』（後編）

レッシング『エルンストとファルク』（後編）

エルンスト お願いだ、おい、もうたくさんだ！ だけど町に行くと、じきまた用事があるんじゃないか？

ファルク で、どうしてこれっていうんだ！

エルンスト どうしてくれって？ ——さっき約束したばかりなのに——

ファルク 町じゃ、仕事がたくさんあるんだ——もう一度云ってこう！ 念のため何やかやと、記憶をたどって、不十分ながら考えをまとめておこう。——僕の書いたものを読んでくれたらよくわかるよ。——日がくれる。町にお帰り。じゃ、さよなら！ ——

エルンスト 別な日が開けたようだ。さよなら！

おことわり

次いでこの友人間に交された第六の対話は、そのままこれに書き記すわけにはいかない。だがそのうち主要な点は、第五の対話に対する批判的注釈になっているが、いまのところ、発表は致しかねる次第です。

訳者注

第三の対話

（この分の注は、本来前号に掲載すべきところ、紙数の都合で本号にまわしたものである。御諒承を請う。）

注一 ピルモント鉱泉——当時たいへん人気であったピルモント温泉の鉱泉飲用療法をさす（前号にピルモントとしたのは間違いにつき訂正）。同温泉はいわゆるピルモント盆地を貫流するエンマー川に臨む温泉で、ウォルフエンビュッテルやブラウンシュワイクに近く、古くから避暑地として知らる。鉱泉は七ヶ所あり、鉄分乃至食塩を含んだ炭酸水で飲用となり、貧血、神経衰弱、腺病質、リューマチ、婦人病、胃腸病に効くとさる。察するに、ファルクは当日エルンストが訪ねて来る前に温浴を試み、鉱泉を飲んでいい気持になっていたようで、一層話がはずんだものと考えられる。

注二 葉をつむ——若葉をつむと、一層木の生育を育成する。

注三 ニトリウム——硝石と同じ。壁土の表面に出て来る白い斑点を、レッシングは硝石の風化物と考え、硝石が分解したものと解していたのである。

### （後 篇）

#### 第三者のまえがき

注一 或る派——後述の新生神殿騎士団のことをさす。（第三の対話、注一〇、一一参照）

注二 名を伏せた——出版当時は伏字にしたので、流布本でも普通、星三つ、乃至は棒線にしているが、本訳書では×××として、疑義なきかぎり、その下に角括弧内に入れて伏字を起した。

#### 第三の対話

注一 手を下さい——フリー・メーンソンでは握手の仕方やその他ノツの仕方や何か、お互に会員たることを知らせる独特の作法がある。この握手の仕方は、ニコライの『テンペル修道騎士会論』(Versuch über den Tempelherrenorden)によると、アルポクラチア人のグノーシスレッシング『エルンストとファルク』(後編)

派同士の握手に仕方に似たもので、手を差出すと、お互に相手の掌が指先で二度軽く触った。——ここでは、前編で蝶を捕えようと追いかけて行ったことから、エルンストがフリー・メーソンに加入するようになったことを暗示している。

注二 神の人が乳と蜜の流るる地云々——神の人は、旧約本来の意味では、直接神と交わり、神の啓示を受けて、これを人々に伝えた人はい、モーゼ、サムエル、エリヤのような人を指すのだが、これは神がモーゼに告げた言葉として、旧約の『出エジプト記』第三章第八節に「わたしは下って、彼らをエジプトびとの手から救い出し、これをかの地から導き上って、良い広い地、乳と蜜の流れる地、すなわちカナンびと、ヘテびと、アモリびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびとのおる所に至らしめようとしている」云々とある。モーゼ以来イスラエルの民に約束されたカナンの地に対する憧憬を示す言葉である。因みに乳も蜜も、当時のイスラエルの民の最も大切な食物であり、御馳走であった。

注三 約束の地の代りに曠野につれ云々——約束の地は、前注のカナンの地、アブラハムとその子孫に与えるように神が約束されたと伝えらる。アブラハムとその子孫は飢餓にあつて、一族をあげてエジプトに通れたが（旧約『創世記』第三十六章一五〇章）、甚しい虐待をうけ、モーゼの導きによってカナンの地に脱出する（『出エジプト記』第三章五節、第五章二二—二四節参照）。

注四 「わが先祖の墓守」——フリー・メーソンの会員間の隠語で、長格、幹事格のものを指す。従って民というのは一般会員ととられる。とにかくこうした特殊な仮托的表现の仕方 (*Einleitung*) はフリー・メーソンのような秘密結社では尋常のことながら、ドイツにおける当時の群小領封君主の絶対制下において全く政治的自由の奪われていた証左でもある。（これがレッシングの場合、スタイルにも比すべきものになつてのことについては拙稿『レッシングのエルンストとファルクをめぐる』(一) 大手前女子大学論集第一号に述べておいた)。

注五 「火」——やはりフリー・メーソン独得の隠語で前注「先祖の墓守」というのと同義。但し、このような符號は、フリー・メーソンの古い儀典には見あたらず、十八世紀末のフリー・メーソン改革とともに姿を消したが、十九世紀初頭、特にフランスで普及したクルルモン派の会規に再び現われるに至つたものだという。アフバウ版の引用符に従って括弧内に入れたが、ボン版では引用符なし。以下同断。

注六 スコットランド騎士修道会——スコットランドのフリー・メーソンはフリー・メーソンのうちでも最古のロッジだと云われ（聖クレイヤ修院の古文書その他）、後世これを種に色々な野心家、香具師が現れ、神秘的なシンボルや勿体ぶつた位階などをつくって私腹をこやし

た。スコットランドのフリー・メソンとか、スコットランド騎士修道団は、フリー・メソンの中でも特に由緒ある、位格の高いものとされたのは、これが特にイギリス王家と関係が深いからであるが、ヨーロッパ本土でもマリア・テレジアの死後（一七八〇年）、フリー・メソンの運動に新生命を吹き込んだ光明会（Illuminatio, Illuminaten-orden）の教祖ヴァイスハウプト（Weishaupt）編の同会会規の草案でも、会員を三つの階級にわけ、初級の研修所（Pfugschule）を経て正会員となり、最後にいわゆるミステリーなる位階にのぼるといふこととなっている。この第二の階級を更に *Illuminatus major* 乃至はスコットランド修練士と、*Illuminatus dirgens* なるスラッドランド修道騎士の上下二つの位階にわけている。

注七 神殿騎士団——神殿修道騎士団（*Frates militiae templi, Milites templi, Templarii*）というのは、十字軍時代、従軍のフランスの騎士九名を中心に一一一九年パレスチナに結成された修道騎士団が、キリストの墓を守り、聖母修道院と騎士道の名誉のために清浄潔済、聖地並びにこの地方と貧しき巡礼者の保護にあたった。イエルサレムのバルドゥイン二世から住昔のサロモン神殿のあった地を賜って、ここを本拠としたところからこの名がある。教会と民兵の組織が一つになったもので、日本流に言えば一種の僧兵みたいなものであった。十字軍中でも諸国精鋭を以って鳴り、その勢力はフランス本土はもちろん地中海諸島、サイプラス方面が近東に及び、武力といい富力といいヨーロッパで匹敵するものもなかったが、十四世紀に入るや十字軍の敗北とともに衰えた。殊に聖地恢復に名をかり高利貸を営み金融を業とし巨万の富を致すとともに、ようやく奢侈驕慢に流れたため、諸侯はじめ一般の反感がつのり、一三〇七年フランスのフィリップ四世がかれらを検挙した上、教団財産まで押収したのを手始めに、各国とも逐次禁圧に乗出し、一三二一年のヴィエンヌ宗教会議で教皇クレメンス五世は公式に解散を宣した。もっともレンホフは、ヴィエンヌの教皇教書が神殿騎士団のことを「サラセン人と結托して、爾余の十字軍従軍兵を裏切り、キリストの神性を承認せず、祭儀において十字架に唾をかけ、邪悪の魔法を行い、バフォメットの形相醜悪なる悪魔に子供を犠牲に供したと難じているのは、あまりにも当を失する」と評している（Eugen Lennhoff, *Die Freimaurer*, S. 121, Fußnot. 1.）。因みに、レッスングの戯曲『賢者ナータン』は、周知の如く、このユダヤ人の賢者の養女と神殿騎士との間の数奇な恋愛と信仰のもつれを、トレランズの立場から描いた傑作である。

注八 錬金術——錬金術と訳したが、原文では *Alchimie* ではなく、*Goldnacherrei* で、まさに「金づくり」である。錬金術師というと初めからレッスング『エルンストとファルク』（後編）

香具師の意があったので、名にしおうカリヨストロ (Cagliostro) アレサンダー・カリヨストロ伯爵と称したが、本名はジウゼッペ・バルザモというパレルモ生れの薬屋出身の大やま師、フランス革命に関連し、フリー・メイソンのかどでローマ教皇から終身禁錮に処せらるる——シラーの『見霊者』や、ゲーテの『大隠行師』のモデルとして知らる) はじめ、ヨーンズン Johnson (グーゴモス男爵 Freiherr von Gugonios と名乗って神殿騎士再建をたねに詐欺をはかった)、プロテスタントの神学者ローザと名乗る錬金術師ディートリヒ・シューマツヒャー (Dietrich Schumacher)、シュレンパー (Joh. Georg Schrepper) 等々、フリー・メイソンを根城に大小の怪行師が横行した。

注九 賢者の石——また「哲人の石」とか「黄金石」と云われ、錬金術師の間で喧しかった一種の靈石。あらゆる金属を金に化する不思議な力があるばかりか、之を得れば不老長寿の命を授かるとされた。昔から錬金術師の求めて得られなかったところのものである。——例えば前注のヨーンズンと名乗るフリー・メイソンはこの「賢者の石」をもっていると云って、ウィーンでヨーゼフ二世に謁見を賜わったが、事がばれてウィーンを追われ、ドイツ各地をあらしまわった末、今度はフリー・メイソンから錬金術を習得したと詐称し、ハッレのロツジにもぐり込み、「イェルサレム神殿騎士団の大獅子騎士」というふれこみで、ドイツにおけるフリー・メイソンの肝入り役のフント男爵にとり入り、集って来た連中から多大の金品をまきあげ、フント男爵の影武者となって働いたが、悪事露見し、ワルトブルク城の一室に監禁された。(Lennhoff. id. S. 124f.)。なお次注、一〇、一一参照。

注一〇 新生神殿騎士団——次注の「自称神殿騎士団」と同じく、フリー・メイソン改革運動のラムゼー (Michael Ramsay) の提唱に呼応し、ドイツで神殿騎士団の再建をはかったフォン・フント男 (Baron von Hund) に率いられたフリー・メイソン嚴津派の一団を指す。後に同派のドイツにおける総元締の地位を占めたウォルフエンビュツテルのフェルディナン公の庇護の下に、当主カール公の禄を食むようになったレッシング自身本書の公表を差控えることを同公に公約している以上、編者として之を刊行する第三者においても、著者に対する手前、名をあげてこれを公表することは憚らざるを得なかったわけである。詳しくは更に次の注一一参照。

注一一 自称×××「神殿騎士団」(Templars-would-bee)——アウフバウ版等ではこの Templars を\*\*\*としているが、一七八一年版によって、伏字を起す。ラムゼーの提唱によってロンドンに出来たスコットランド騎士団のことを指すが、当時のドイツのフリー・メイソンは好んでフランス語を用い、フランス渡来のものなら、なんでもむやみと有難がったものであった。殊にイギリス帰りのプロシヤの皇太子フ

リードリヒが宮廷内にロジックをつくって、フリー・メーソン入りを天下に公表して以来、ドイツ、オーストリア全土にわたって、貴族貴顕の間にもフリー・メーソンの組織はひろまって行った。ところで、彼の好敵手として現れたのは、マリア・テレージアと入婿のヨーゼフ一世とその子ヨーゼフ二世だった。両家の拮抗は、フリー・メーソン間の分派間の緊張を一層つものらせ、それがまた両家の確執を助長させることにもなったが、いずれも同じく啓蒙君主をよそはいなながら、当時フランスを中心に全ヨーロッパに澎湃と起って来た革命運動に対する防波堤としてこれを利用しようとした点では本質的には変りはない。フリー・メーソン内のいわゆる革新運動もこうした反動的対策の一つで、フリードリヒの啓蒙主義といい、ヨーゼフ二世のヨーゼフ主義といい、カトリック側のフェブロニアニズムといい、いずれもトレランスをいい革新を説くが、カトリックを主柱とする封建的反動勢力と折からの革命運動との妥協を策したものに外ならない。もっともフリー・メーソンの本場はどこまでもイギリスにあった。殊に名誉革命の妥協成立後、スコットランドを併せ得たところから同地では他のヨーロッパ諸国より先んじて着実に資本主義の途を歩んで行ったイギリス絶対主義の庇護の下に急速に発展を見たので、ここにこのイギリスのフリー・メーソンが当時ヨーロッパ諸国の大小啓蒙君主の注目をあびた秘密がある。いろいろと形は異なれ、絶対主義復活の内部運動に促がされて、騎士制度復活の精神が各国のフリー・メーソンの内部に浸透して行った。こうして神殿騎士団をフリー・メーソンの濫觴として、その復活を叫ぶラムゼイの改革に人々はとびついて、彼のこの言説を信じた。前注の如く、神殿騎士団は一三二一年フィリップ美王の弾圧のため一網打尽、会長格のジャック・ドゥ・モライ(Jacques de Molay)も焚刑に処せられたが、この時身を以って遁れた騎士団の残党は一三二一年この最後の神殿騎士団会長の遺托を貴重な遺産として受継ぎ、無事スコットランドにのがれ、これを同地のフリー・メーソンのロジックのうち四世紀に亘って伝えたのであった。こうしてこれまで不明のままになっていた神聖騎士団の歴史が熱狂的に研究され、神殿騎士団の名誉恢復をはかろうということになる。偶々パリでフリー・メーソンに加入して、フリー・メーソン第七州の補佐役として帰国していたフント男爵(Freiherr von Hund und Alenrothkäu)がドイツにおけるフリー・メーソン騎士団の頭領株になったが、彼がこの地歩を築いたのは、オーベルラウジッツの所領ウンヴェルデ(Unwürde)に設立した「三つの柱」(Zu den drei Säulen)というロジックを設立した外に、もう一つはニュルンベルクの「三つの槌」(Zu den drei Hammern)というロジックがあって、後者の会長は、同男によると「さる匿名の上長から」ドイツ州の司令に任命された元帥だった。ところでこれらの会員は極く内密に騎士に任命され、フント男に対し絶対服従の義

務があり、それがいかにも嚴重だったところから、やがてこれを公式に嚴律派 (Strike Observanz) と呼ぶようになり、従来通り三位階制を固執したイギリス式のを緩律派 (Late Observanz) と區別された。(フリー・メーンソンの色々な派を普通システム System と言っている。) 内部の位階制度も、僧職並びに騎士の位階制度を混用し、存外に嚴格である。ところでこの嚴律派はその後ますます盛んになったが、多くの秘密結社同様一種の二重組織をなし、先ず団員候補は三つの位階を経てスコッチ・マスターの位に昇進し特に印可を得たものに限りに局 (innerer Orden) に入ること許され、修道士 (Novize) 乃至「鷲騎士」(Chevalier de l'aigle) となり、次いで「神聖騎士」に進み、最後に誓願騎士 (eques professu) となる。騎士も「内局」に入るようになること集りはロッジではなく、いわゆる会議所 (Kapitel) ということになっていた。ところでフント男の側近筋の私かに洩らしたところによると、上述の「さる上長」というのは、一七七四年スコットランドに來り、エジンバラ城で「神殿」の復興を誓って、ウィリアム獅子王時代あり崇嚴で立派なものにしてしてみせると豪語したチャールズ・エドワート・スチュアートだが、果してこれが大ブリテン国王となったチャールズ・エドワートかどうかは、この方面の研究家ケラー (Ludwig Keller) の指摘を俟つまでもなく疑わしいが、更に次の指摘は一層注目し値する。「この神殿騎士団の会長たる総裁は、理念上は世界中のあらゆるロッジ、あらゆるフリー・メーンソンの上に立つものであった。こうして所謂大革新が必然だという認識はフリー・メーンソンのロッジは勿論、脱退した部外者の間にも、これを要望する声次第にひろまって行った。折柄、カトリック教会側がフリー・メーンソンに全力をあげて反対を表明したが、たまたま之と時を同うして、かれらの同盟者だった封建貴族の前途有望な保護国の間から、同じくフリー・メーンソンのあらゆる慣習をうちにもった新しい騎士団が立ち上ったのであった。従来の保護者たち——これにはハノーヴァー家の外に、一七四〇年以後はプロシヤ国王も加わった——を尻目に蹴おとし、フリー・メーンソンの組織を漸次カトリックの一宗派に転ずる可能性が視界に出て來た。」(E. Lennhoff, *ibid.* S. 123)。

こうして神聖騎士団は見る見るめざましい發達をとげるが、ここに現れたのが前注九に述べたヨーンソンという怪行師だった。ラムゼー以来、改革と称して神殿騎士団復活といった大時代な芝居をうった連中は、大体鍊金術のような誇大広告にひっかかる要素を多分にもっていた貴族や成上りものの野心家を言葉巧みに籠絡する術を心得ていたので、自他ともに神聖騎士団の団長を以て認めていたフント男自身これにひっかかったことは、容易にその人となりを知るに足る。こうして神殿騎士団もようやく昔日の勢威なく、団長フントも一七七六年に

死んで、メルリヒシュタット教会の祭壇の下に葬られたが、これが言わばその「最期の始まり」であった。(E. Lennhoff. id. S. 126)

之より先き、フリー・メーンソンのベルリンの総本部「三つの地球」(Zu den drei Weltkugeln)のマイスター格で、神殿騎士団の熱烈な信者の前国防委員、クリスチアン・フォン・シュューベルトが厳律派の密使としてドイツ各地を廻り、騎士団のためにロッジを獲得、年々盛大な大会を開いて来たものだが、一七七二年の大会で、カトリックから転向したフォン・シュタルク (Joh. Aug. v. Stark) 総監督が提案した聖職派との合同を策した新フリー・メーンソン案が決定を見、カトリックの聖職派に強要されて益々カトリック化の傾向を強めた。フントは合同後も団長の地位に留まったものの実権はすでに他に移っていた。即ち、一七七五年フリードリヒ大王の叔父のブラウンシュヴァイク公フェルジナント公に全スコットランド・ロッジの総最高位 (Magnus Superior ordinis) の称号が与えられ、同会の総元締となったが、一部のフリー・メーンソンが向う見ずに同じ航跡を泳いで行く危険を怖れたフリードリヒの懲憑によるものだという。

注一 二 フリー・メーンソンの秘密云々——この場合、秘密というのは奥儀、秘やくというに同じく、問題の鍵となるべき秘密を指す。人道主義者ファルク(→レッシング)の考えているフリー・メーンソンの秘密というに外ならない。以下の対話はやがてはフリー・メーンソンの否定——レッシング自身としては脱会——に連なっているからである。さればこそ、ファルクは再び自由撞着のジレンマに陥るので、この対話の弁証法には注意する価値がある。この後で、ファルクは急に別人のように陽気な冗談をとばし、相手のエルンストを戸惑いさせるが、いまままで口まで出かかっていて抑えていたことを云ってしまった解放感がここに至って爆発している。殊に「かれらのなさざること、すべてに祝福あれ!」というあたりは痛烈である。因みに、ここに「なさざること」したのは、普通カトリックや法律用語で「不作為」とか「債務不履行」の如く訳されている言葉で、なすべくしてなさざる場合という。

注一 三 ×××「神殿」で働いているフリー・メーンソン云々——これはハーマン版に基いたアウフ版によったが、ボンク版によると「あの立派な神殿話のフリーなメーンソン」となっている。この場合、フリーとは「特権をもった」という意味のようである。(Lennhoff id. s. 35)。

注一 四 ー——「白地のマント」にー——「赤十字」——神殿騎士団の団員は、白地八角型の十字架を配したマントを羽織っていた。その伊達姿がまた当代の人気を呼んだ。伏字を示すー——はアウフ版による。星三つになっているのが普通のようなだ。

注一 五 丸々した海綿云々——前注七に述べた如く、フランスのフィリップ四世(美王)らが神殿騎士団の莫大な財産に目をつけ、事を構えて

これを弾圧、その全所領をフランス、カスチリア、イギリスの各国王が分割没収したことを暗示す。

注一六 鯨の仔に向って云々——ケストナー (A. G. Kästner, *Vermischte Schriften*, 1772, II, S. 151) によると、ザクセン選帝侯モーリッツの故事に、航海中、鯨に出会い、船から空樽を鯨めがけて投げつけたところ、鯨は船なんか目にもくれず、その空樽にじゃれついていたので、船は危地を脱したという。レッシングは『ハンブルク演劇論』一〇一—一〇四章の中でもこの話をひいている。なおこの話はローエンシュタインの『アルミニウス將軍』（一六八九—九〇年）、リチャードソンの小説『クラリッサ』（一七四七、八年）にも用いられているが、中でもスウィフト童話に出て来るのはカントが『人類学』に引用して有名である。

注一七 このどんなキリスト教徒だろうと云々——マイエル旧版では、ユダヤ人の返事はこの前で終って、後はエルンストの言葉ということになっていたので、新版ではボンゴ版通り、続けてユダヤ人の言葉となっている（その他、流布版でも新旧多少の差はあるが、煩わしければ一々は注せず。ただこの箇所が最も大きなもので特記したまでである）。——十六世の宗教改革運動の結果、一五五五年のアウグスブルクの和議によってルター派とカトリック派との間に新旧両派の調停が成り、ルター派、カルヴァン派は領邦君主及び帝国直屬都市領内で信仰を選ぶ権利を得たが、フランスではユーグノー戦争の結果たるナントの勅令（一五九八年）、イギリスでは例の清教徒革命（一六四二—四九年）の過程で一六四七年の水平派の人民協定からブレタの宣言（一六六〇年）、人身保護令（一六七九年）から一六八九年の寛容法の公布（一六八九）により、ドイツでは一六四八年のウェストファリア条約により、キリスト教各浄手を軸とするトレランスの原則は礎をおかれた。従ってここで「神聖ローマ帝国領内公認の三宗教の区別」というのは、キリスト教の三大宗派であるカトリック、ルター派（福音派）及び改革派（カルヴァン派並びにツヴィンリ派）の新教をさす。総じて単に宗教という場合キリスト教をさすのは当時一般の用法である。それをキリスト教、ユダヤ教、マホメット教とするのは、この場合考えものである。もっとも『賢者ナータン』の有名な「指環の譬話」は時代的にも後者に属するが、トレランスの原則を異教にひろげたのは、飛躍的な進歩と云わなければならない。

注一八 ヤーコプ・ベームなり、ハンス・ザックスなり云々——ベーム (Jakob Böhme, 1575—1624) および ハンス・ザックス (Hans Sachs, 1494—1576) も、ドイツ近代の黎明期のプロテスタントの著作家で、いずれも靴屋の親方であった。ベームはドイツ神秘思想を代表する進歩的な思想家で、極めて現実的な汎神論的自然観をもち、あらゆる事物の根源としての神のうちにも悪の存在を認めた。そしてこの世の生成や

存続は相反する対立物の抗争から説明されるというような弁証法的考えをうち出し、同じく神秘派ながら反動化の傾向を辿って、カトリック教会の彼岸的神観念帰依したゾイゼ、タウラーなどの末流とは違って、十六世紀の此岸的なルネサンス人であった。

——ハンス・ザックス (Hans Sachs, 1494—1576) ニュルンベルクの仕立生れの靴屋の親方、傍ら同地の職匠詩人の頭梁として活躍した。ルターを諷った『ウイッテンベルクの夜鶯』で一躍有名となり、敬虔淳朴な職匠詩風の作品の外、軽妙洒脱、抱腹絶倒の滑稽のうちにも寸鉄人を刺す諷刺あり、讚美歌、謝肉祭劇、悲劇、喜劇、狂言、寸劇、對話、寓話、即興等々全部を算えれば七千近い。新興のドイツ庶民階級のために、万丈の気をはいた十六世紀ドイツ最大の作者である。

注一九 つまり退屈としてのぎ仕事の必要上云々——ボング版にない旧版(一七八一年ハーマン版)によったが、パウル・リラ編のアウフバウ版、マイエル版新旧ともこの全文を削って、「そいつが相憎——」とす。ボング版注は、これを当時ロシアの貴族の間にあったフリー・メーソンまがいの秘密結社のコスモポリタニズムに対する消極的な判断を指しているのではないかと言っているが、やはり主君を憚ることではないか。まことによくフリー・メーソンの階級性についている。

注二〇 ロッジ——フリー・メーソンの集会所、或は組織単位のことから、ひいてはフリー・メーソンの組織をいう。ここではロッジ (Lodge) と英語訳をとったのは、すでに日本語化しているからで、原文では勿論ロージェ (Lodge) とフランス語が使われている。ドイツ語では *Bauhütte*——これは普通山小屋、飯場の意。第五の對話の注一八を参着。

## 第五の對話

注一 アメリカ人のために云々——この對話が書かれたのは、アメリカ独立戦争とほぼ時を同じうし、当時全ヨーロッパの自由を愛好する人々の血を湧かせたもので、これがまたフランス大革命の一つの導火線ともなった。殊にこれがイギリス植民地抑圧に対する自由解放の斗いでもあって、ドイツでもフリー・メーソンの関心の的となった。今日いまだにアメリカ独立やフランス大革命の運動を悉くフリー・メーソンの活動のようという歴史家(例えばフランスのガストン・マルタン教授 (Gaston Martin, *La Franc-maçonnerie et la Revolution*, 1924) が少なくない。フェルディナント公がイギリス側の要請を蹴って、アメリカの遠征軍司令を断り、ドイツにおけるフリー・メーソン総元締たるの

貫禄を示したが、その甥の当主カール公はそれを尻目に一七七九年アメリカ四三〇〇の兵をイギリスに、更に同八八年には三〇〇〇の兵をオランダに、同九五年には一九〇〇の兵を再びイギリスに売っている。従ってこの叔父甥の間も決して好くはなかった。

注二 議会——アメリカ国会のことを普通 Congress と呼んでいる。これがまたフリー・メーンソンの用語では大会等の会議にも使われていた。

注三 その呾言云々——アメリカ独立戦争をおこしたのは、フリー・メーンソンがかれらの目的達成のためだということ。だがワシントン、フランクリンをはじめ、独立戦争の指導者たちは事実大多数フリー・メーンソンだった。その他ジェムズ・オーチス、サムエル・アダムス、パトリック・ヘンリー、ジェームズ・マズソン、ナタニエル・グリーン、リー・サリヴァン、ラファイエット、モントゴメリー、ジャクソン、ヘンリー・ノックス等の将帥を加えれば、枚挙に堪えない。

注四 血を流すということは云々——ベンジャミン・フランクリンの言葉。フランクリンはヨーロッパ各地でアメリカ独立戦争のために宣伝活動を行い、軍資金の調達その他外交工作のため最も活躍したが、その際進んでフリー・メーンソンに加入した。この言葉は一七七二―七五年ジェームズ・クックの世界一周旅行に加わって有名な世界旅行記を著したゲオルク・フォルスターが直接フランクリンから聞いたもので、「自由のみがよく徳に達し得るものであって、徳はまた理性によって可能となるものであるというを教えられた。血を流すということは、何も血に値するってということじゃない」による。もっともヴィトコフスキーによると、レッシングは一七九五年ブラウンシュヴァイクで或る自由思想家からまた聞きにきいたので、後で加筆したものであるという。因みにフォルスターもフリー・メーンソン、元来啓蒙主義の自然科学者だったが、フランス革命に刺激されて革命運動に加わり、一七九二年マインツのドイツ、ジャコバン党から推されてマインツ共和国の副大統領となったが、忽ち同革命政府の転覆とともに反逆罪に問われて、パリに脱出、一七九四年同地で客死した。今次大戦後、世界各地で再評価の試みが行われ、特に東独では新事実が続々発表された。西独から来日したブーテノウ教授（現在ゲッチンゲン大学）、その他新進若手の学者によって注意を促されたが、このドイツ有数の世界人もわがゲルマニストの間にはまだあまりとりあげられていない。

注五 『ロンディノポリス』——ハーマン原版では『ハウエルのロンディノポリス』と、著者名まで示している。即ち一六五七年ロンドン出版の同書には、ロンドンの建築業者でフリー・メーンソン加入者が記されている。ボンゲン注によれば、レッシングの『切抜帳』（Kollektanen）のフリー・メーンソンの項の中で「今世紀数十年フリー・メーンソンのことなど何処にも記されていないという私見に対し、ボ

ード氏は一六五七ロンドン刊行のロンドン年代記の中から或る箇所を指摘してくれた。この年代記の題名は『ロンドンポリス。ジェームス・ハウエル氏編ロンドン市史』《An historical Discourse or Perustration of the City of London etc. by James Howell Esq.》<sup>27</sup> 同書四十四頁に次のように記されている。「第十八。メーソン会、別名フリー・メーソンは多年慈善団体となっていた。だがヘンリー四世の時代までは結社とはなっていないかった。かれらの秘密の紋章は三つの銀の城の山型になった上に両股コンパスを戴く。ハウエルは作家として知られているが、彼がロンドンポリスという題名の作を書いたということは知られてない」云々と。因みにこのハウエルはチャールズ二世当時の史料編纂官で、内乱勃発後王党派として入獄、獄中で大陸旅行記を書いた外、Dodonas Grove (1604), Instruction for Foreign Travel (1642), Englands Tears for the Present Wars (1651) 等がある。なおここでレッシングが名を挙げているボーデ氏 (Joh. Joachim Christoph Bode) は三つまでもなく彼のハンブルク時代からの友人で、出版業を営む進歩的思想家である。ニコラーイなどと同じく熱心なフリー・メーソンの会員であった。一七七一年レッシングはハンブルクへ行く途上、ボーデとフリー・メーソンについて論じあったことがあるが、それがこの対話篇が出来る動機ともなった。(これについてはいずれ別稿「レッシングの『エルンストとファルク』をめぐる」に譲りたい)

注六 ヘンリー六世時代の国会文書——一七二三年のアンダスン編『フリー・メーソン史』(後注九及び一〇参照) 第一版によると、イギリス国王ヘンリー六世(一四二一—一七一年)即位の翌三年、一四二五年国会は「建築業組合にかぎりメーソン会員は食堂並び集会にて会合すべからず」と規定、フリー・メーソンの集会禁止する法令を出している。これは建築業者の価格並びに賃銀制定のためのギルドの運動を弾圧にかかった最初の法令として知られている。この弾圧後、メーソンは純然たる同業組合組織として一層の飛躍を見たようである (Lennhoff, S. 53)。

なおヘンリー六世は、周知の通り、シェクスピアによって戯曲化されたハイツの息子で、ランカスター家の始祖、例のバラ戦争のためのロンドン塔に幽閉されて殺された。だがこの戦争は結局ランカスター家の勝利を以って終り、次のヘンリー七世によってイギリス絶対王制は確立されたのであった。

注七 スヴェーデン国王カール十一世が云々——ボンク版注によると、これは前述のアンダスン編『フリー・メーソン史』(七二頁以下)やレッシング『エルンストとファルク』(後編)

プレレストンの『フリー・メーソン考』（一七一頁）に載っていることで、十八世紀になってフリー・メーソンは自分たちのロッジの由緒ある証拠としてこの特許状をもち出しているが、これはどこまでもかれらが迫害を免れようとして作りあげた明白な偽書だということである。スヴェーテンのフリー・メーソンは特に同国王家と極めて密接な関係があったことは、レンホフの指摘する通りであるが、「カール一世当時（一六六〇—一六九七年）は今日の意味におけるフリー・メーソンは存しなかった」と、アウフバウ版の注者は記している。もっともカール十一世即位の一六六〇年には、彼はまた五歳で、一六七二年になってようやく自ら政をとるようになった。

注八 あの哲学者の——ペンブルーク伯宛の手紙——ペンブルーク伯、ウィリアム・パート (Pembroke William Herbert, Third Earl of, 1656—1733) とロックとの関係は、ロックがオックスフォード大学後一年間イギリス公使秘書としてベルリンに赴任して以来のことで、一六六六年帰国後同伯爵家の侍医兼家庭教師となったが、爾来同伯を佐けて秘書となり（一七七二年）更にオランダに亡命を共にするなど、政治的にも浅からぬものがあった。ロックのこの手紙については、フリー・メーソンの有力者だったカンペ (Joach. H. Campe) 宛の手紙の中でレッシングは例のプレストンの『フリー・メーソン考』にも「欺瞞者乃至被欺瞞者」を見出し、更にヘンリー六世当時のフリー・メーソンの実態にふれて次のように云っている。「ヘンリー御直筆だといわれている裁判決書というも単なる茶番にすぎず、ライランドが之を筆写したのをロックがさらに解説を加うるが如き容易ならぬことだったろう。例えばヴェネチア人のことをフェニキア人といい、ペーター・ガウアのことをプタゴラスというような注を加えているが、まったくロックらしくらぬところで、ロックのこの注釈には甚だしく浅薄な精神が出ているようなところがなお多々あるのであります。ロックともあろうものが、ピタゴラスが幾何学の定理と悉く秘儀としたというが如きことを（注釈七〇—一八頁）ゆるしたでしょうか？……要するに、この注釈をロックのものとしている所以のものからして、すでにロックならぬものなであります」云々と否定的である。ロック (John Locke, 1632—1704) については注するまでもなくイギリス経験論の大立者で、いわゆる名譽の革命のイデオログ、スコラ哲学に反対して理神論の立場をとり、信教と思想の自由を主張し、『寛容書簡』 (Letters of toleration) をシャフツベリ侯に献じた。ところがこれが忽ち非常なセンセーションを起し、之がために却ってフリー・メーソンの嫌疑をうけたという。というのは、このトレランスというこそフリー・メーソンの根本原理だったからで、当時はこの言葉はヒューマニテイと同意語のように考えられたことすらあったのである。（もっともこの『寛容書簡』については異説あり。書名も Letters concerning

『Toleration』が本場で、十年後の一六八九―九一年刊行という。オエールスハウゼン注では前者を偽書としている。因みにレッシングは初期の思想的成長の過程においては、イギリスのイデオロクの中でも特にロックとシャフベリーに最も強い影響をうけた。

ペンブルーク伯はアイルランドの名門、三代の王に仕え、国璽尚書、イギリス及びアイルランド海軍元帥として、またイギリスの海軍植民の事業並び外交関係の最高顧問だった。すでに一六一七年にオクスフォード大学の名譽総長に推された(ペンブルーク・カレッジは彼の名に因む)。また文学の造詣深く、文学芸術のパトロンとして知らる。殊にシェクスピアを好み、シェクスピア全集の *First Folio* を弟フリップに献じている。

注九 牢強附会の怪文書、偽書——十八世になってフリー・メーソンもようやく隆盛に赴くや、その存在を由緒あるもののように権威づけようとする試みが続々とあらわれた。後注一〇のアンダソンの『フリー・メーソン会史』をはじめ、プレストンの『メーソン考』(W. Preston, *Illustration of masonry*)、オリヴァ博士の『フリー・メーソン古文書』(Dr. G. Oliver, *Antiquities of free masonry*)等、枚挙に遑ないが多くは系図<sup>、</sup>知り<sup>、</sup>が王侯貴族の感状や古文書の類を偽造、或いは捏造したものか、教会の伝承や聖人伝等に縁起を求めたり、或はギルドその他の職人組合とか、ギリシャ、エジプトその他、オリエントの高僧知識の権威をかりて勿体をつけようとしたものだが、之によってかれらはその既得権の擁護と同時に、派閥斗争に対し自己の正統性を主張しようとした。

注一〇 アンダソンの根も葉もないちゃらんぽらん——ロンドンのスコットランド長老教会派の牧師アンダソン (James Anderson, 1793) の『フリー・メーソン会憲史』(The Constitutions of the Free-masons, containing the history, charges, regulation etc. of the most ancient and right worshipful fraternity, 1723 London, folio 91 ps.) のことだ。ロンドンのグラント・ロッジの公認を得た最初の権威あるフリー・メーソン史、其の後版を重ね、各国語に翻訳され、各国に流布された。一七二二、二三年度の総裁モンタギュー侯に献じたデザグリエ (Theoph. John Desaguliers) の献辞に次いで、同会の広汎な歴史を記しているが、レンホフの云うように「まったく伝説としてしか期待できず、創立当初のことはできるだけ由緒あるものと見せかけようとする努力によって書かれたものである」。こまごまとギルド伝説によりつつ、ロンドンの大建築家クリストファ・レンのことを挙げる辺りまではまだいいのだが、果は人祖アダムやモーゼに迄遡り、或はピタゴラスを拉し来ってフリー・メーソンの開祖のように云ったり、史書としては何ら信憑するに足らず、レンホフも云っている通り伝説以上に

レッシング『エルンストとファルク』(後編)

出るものでない。三八年改訂新版も大して変わったものではないが、ロンドンのロッジの公認を得た上、「ロッジの慣習に対する唯一の会憲史」と推薦され、この種のものとして最も権威あるものとされた。この新篇『フリー・メーソン会憲史』によると、ロンドンのグランド・ロッジの確実な記録はようやく一七二三年六月二十四日から始まるということである。

注一 同名の職人組合——すなわち石工乃至左官職の組合。

注二 <sup>マッセン</sup>Massonei——中世における使用人仲間の組合のことで、マッソネイ (masonei)、マッソネイ (massonei)、その他マッセネイ (massenei)ともメッセネイ (mesenei)ともいう。いずれも中高ドイツ語で、家僕、召使、家の子、扈從、騎士仲間の意とさる。元来は古代フランス語の *masnie* (奴僕従者の総称、後にはアーサー宮廷に集った騎士たち) で、ヴィトコフスキ注によると、ローマンス語系の *maïne* (—フランス語の *maison* 家)、ラテン語の *manio* に由来する言葉である。これを <sup>マ</sup>nase (テーブル) から来たというレッシングの説は今日一般に承認されていない。すなわち  $\blacktriangleleft$ Free-mason $\blacktriangleright$  (ドイツ語では *Freimaurer*) の原意は石工で、*free-stone* (特別な石目がなく、どんな形にも自由に採れる岩石) に加工する職人。従って一七一七年以前の石工左官組合は何もここにいるフリー・メーソンリではなく、ギルトのような純粹の職業組合であったというのが定説である。

注三 英語で「メースンリー」じゃない云々——云わんとする意味は、英語では「メースンリー」とは云わず、「メーソニー」ということになつてゐること。

注四 アングロ・サクソン人の言葉——アングロ・サクソン語でテーブルのことは、 $\blacktriangleleft$ mes $\blacktriangleright$ 乃至  $\blacktriangleleft$ nyse $\blacktriangleright$  という。中世英語にはこの言葉はもはやない。ラテン語の *mensa* (テーブル—食堂) に基く。

注五 マスコピエ (*Maskopie*)、マスレイディク (*Masleidig*)、マスゲノッセ (*Masgenosse*)——これらの言葉は中高ドイツ語乃至中世英語には存在しており、いずれもゴート語の *maiti*——古ゲルマン語の *masz* の合成語、最初の *mas* というのは食物、食事 (食事の間) の意 (ラテン語の *mensa* に基く *messer* (ナイフ) とか、*mettwurst* (脂肉ぬきの豚肉ソーセージ) なども同じ)、マスコピエは商社、寄会い、マスレイディクは、食欲のない、不快、不機嫌。「語彙」の中で (レッシングは断食 *fastidians* の意に解している)、マスゲノッセは食い仲間、会会者の意。

注一六 ルターの時代には云々——ルターの時代には *Massonei* という形は *Massenei* 或は *Messenei* と訛り、専ら酒飲み、賭博者、カルタの遊び仲間から旅の道づれ等の意に用いた。

注一七 アグリコラも云々——アグリコラ (*Joh. Agricola, 1494 ~ 1566*——本名シュニッター *Schnitter*) プロテスタントの神学者、神学上の争いからルッター、メランヒトンと袂をわかす。新高ドイツ語形成に強い影響を与えた『ドイツ語里諺集』(750 *Teutscher, Sprichwörter 1529—34*) の第六六八に「アーサー大王の宮廷に入ったようになること」とあり、之をレッシングが引用したのであるが、『美辞名言集』(*Sprichwörter, Schöne, Weise Klugreden, Bl. 258 b, 1560 Frankf. a. M.*) には「騎士の集りを円卓乃至メッセネイ (*Messenei*) とう」と注している。騎士が酒宴などで飲めや歌えよとどんちゃん騒ぎをするということになっている。

注一八 ロッジ——第四の対話の注二〇に記したように、原文ではフランス語系のロージエ (*Loge*) 劇場の仕切り棧敷と同じく、語原は古高ドイツ語の *laubá* (今日のドイツ語の *Laube*) で、それがロマン語では *loggia—loge* となったもの。*laubá* はホール、屋根、玄関の意、それが *loge* となると小屋の意に転じている。元来、働き手を保護し、道具類を保存したり、設計したりするために、主家の大きな建物と並んで建てられた納屋、仮小屋、飯場を意味する言葉だが、後にフリー・メイソンがこれをかれらの集会所につかったもので、会員の年齢、役柄、その他独立生計者等々によってこれを親ロッジ、娘ロッジとか、大小地域別に区別統合した。会員はここを正規の集会所として儀式を取行う外、その時々目的のために集合し、その役割に応じてまた勤労ロッジとか、祭式ロッジとかいうものができた。大抵は所謂円卓ロッジに集り、会員が死ぬと葬儀ロッジに参列した。こうしてロッジの名称が濫用されるに従い、意味も段々あいまい多義になった。

注一九 円卓騎士会——アーサー大王の円卓騎士物語に因んで、十三、四世紀イギリス始め、フランス、ドイツ、オランダ、スペイン等ヨーロッパ各地の宮廷及び騎士社会に広まった騎士の集会で、同時にここで武芸の試合等の競技や酒盛りが行われた。シャルル六世治下のフランスで最も殷盛を極めた。イギリスではドラゴン退治の伝説で有名なイギリスの守護の聖人ジョージとの因縁もあって、その後騎士修道会の内部にあっても引続き存続した。元来騎士階級の間にかぎられたが、後には上流市民にも門戸を開放した。ホング版注でも詳しくは不詳とある。

注二〇 *Mase Thanes*——*Thanes* は英語のセーン (*thane*) と同系語で、北歐語にもあるが従士の意、アングロ・サクソン語でやや大きな土地

レッシング『エルンストとファルク』(後編)

所有者の意から、更にはその所有地のことも指す。主としてスコットランドで知行をうけていた郷土について用いられた。アングロ・サクソン時代は世襲貴族と自由民との間の土豪で、シエクスピア戯曲などでは貴族の称号に用いられてる。この自分については多少の変遷はあるが、ノルマンの征服時代までは実在していた言葉である。マイエル旧版では *Mase Thonas* となっていたのを新版で *Mase Thanes* と訂正している。由来論議のある言葉である。

注二〇 ××× この伏字は新しいところでは東独のアウソバウ版注始め、今日諸本殆どみな神殿騎士団を注しており、中にはマイエル版のように神殿騎士と伏字を起しにしているものさえある。それをボン版で伏字のままにしているのは、それなりに理由があるのかも知れない。或は円卓騎士団とすべきか。もっともこのすぐ後で解散云々に言及しているので、神殿騎士団とするより外に解しようがないが、それが十七世紀末までロンドンのどまん中に頑張っていたとは信じ難く、そうしたことを考慮に入れて\*\*\*としたと思われる。マイエル版の注者ヴァイトコフスキも、この説は直ぐ後のフリー・メーソン成立についてのレッシングの想像同様全く根拠ないことだとしており、結局訳者としても×××とし、訳もそのつもりで読んだ。御教示を仰ぎたい。

注二一 聖ポール教会——ロンドン市の中央やや西よりの地にあり、現在の建物は一六六年のロンドン市で大火で烏有に帰した後、クリストファ・レンの設計により、一六七五年から一七一〇年まで三十五年かかって完成す。ウェストミンスター大寺院と同じくイギリス国家に大功あった人々の墓その他記念品多し。世界第一はローマの聖ペトロ大寺院を指すならん。

注二二 クリストファ・レン (*Sir Christopher Wren, 1632—1723*)——ジーンズ (*I. Jones*) と並んで十七世紀イギリス最大の建築家。グレシャム、オクスフォード等の教授として天文学を講じニュートンの大業の基礎をつくる。ケンブリッジのペンブルック・カレッジの礼拝堂を処女作とし（一六六三—五年）、オクスフォードのシールド劇場、ケンブリッジのイマニエル・カレッジ礼拝堂等に業績を示した。一六六六年ロンドン大火後、大規模な復興計画を提出したが実現せず、一六六八年イギリス王宮建築総技監となって、聖ポール大寺院の修復工事に当った外、ロンドン市内だけでも五十余の教会の再建築工事に関係す。その後彼に手に成ったものは、国立取立所、グリニッチ天文台、ウェストミンスター・アベイの西塔、ケンシントン及びハンプト・コート宮殿等々枚挙に遑ない。また、デサグリエ *Desaguliers* などと共に後年のローヤル・ソサイティの基礎をつくった。ロンドン最初のフリー・メーソンの創立者のように云われているが、これは例のアンダ

ースンがでっちあげたことで、本人はフリー・メーソンとはあまり関係がなかったようである。

注二三 或る学会云々——イギリスのローヤル・ソサイティのこと。当時聖ポール寺院の建築はロンドン全市民の注目の的だったので、業者は勿論、一般市民もその建築の模様直接当事者たるクリストファ・レンにきこうと、彼が関係していたと伝えられるフリー・メーソンに入会を申込みものも多かったが、これらの申込はすべて断られたという。もともと彼は学会的なものを設立して、学問をひろく大衆のものとし市民生活に貢献したい考えであったのに、之とは逆にフリー・メーソンのような秘密結社に加入したというのは、はじめから解せぬ話であるが、当時ロンドン大火後、盛んに復興事業が起ったにつれ、一時解体したか見えた建築業者のキルドが復活し、この中世的な組織を更にひろげてフリー・メーソンとして門戸を開放することによってよりよき効果を期待したような形跡がないでもない。だがレンを以てこのフリー・メーソンの創設者とみるのはあたらす、ヘットナーのいうように、彼はむしろギルドの伝統に結ばれた最後の一人だったのである。

## おことわり

注一 批判的注釈——遺稿の断片『兵士と僧侶についての対話』その他ボング版収録の関係書類を見ても、特にこの「注釈」に該当するものはない。ただこの「おことわり」はハーマン版以来、すべて本文に添えて出ているので、当時作者の意図にはあったのだが、どうやら実際には書かずにおわったもののようなのである。或は破棄されたものかも知れない。ボング版注の如きは、作者はもともと本気には考えなかったものではないかと云っている。或は然らん。レッシングに限らず、作者というものはよくこうした虚構に一種の韜晦或は脱出を見出そうとしているからである。附録の断片はそうした注釈の一つとも考えられないこともない。

## 附 録

レッシング『エルンストとファルク』（後編）

兵士と僧侶についての対話

A  
――――

B 君は兵士の方が僧侶よりずっと人勢が多いと云わんとするのかわか?

A いや、いや、僧侶の方が兵士より多いよ。

B ヨーロッパのあれこれの国じゃ、なるほどと仰しゃる通りだ。だがヨーロッパ全体だとうか。百姓が自分の畑がかたつむりや鼠に荒らされてるの見たら、この場合怖ろしいことは何か? かたつむりの方が鼠より多勢だということか? それともかたつむりなり、鼠なりがそんなたくさんいるということか?

A そんなことわからないよ。

B わかるうとしないからさ。そもそも兵士とは何だね?

A 国家の干城というやつさ。

B そして僧侶は教会の支柱というところさ。

A そんな教会なんて!

B そんな国家なんて!

A 夢を見てるんじゃないかね。国家だ! 国家だ! 国家こそ国民一人一人にこの世における幸福を保証するものだ。

B 教会こそ、各人にあの世における救済と約束するものだ。

A 約束する!

B 阿呆かいな!

これは一七九五年、レッシングの死後実弟カールが『レッシング伝』第二巻に発表したもので、表題もそのとき附せられた。内容、形式と

もこれと殆ど同じ対話の断片が他にもう一つあるが、この方が最後のやりとりが二つ多いので、こちらを選んだ。テーマから見て『エルンストとファルク』の第二の対話に最も関連が深いように考えらる。或は「おことわり」にある批判的注釈、或はこの対話篇の後に続くものとして作者がメモしておいたものか。とにかく問題が問題だけに発表の見込なしと諦めてしまったものかも知れない。ボング版には『エルンストとファルク』その他之に關聯のノートが収められているが、フリー・メーソンに關する言学的歴史的研究ノートで、内容的には殆ど全都第五篇の対話並びに本注の中にとり入れられている。

#### 前号 正誤表

- 五一頁一三行 「おい」の句読点を加う  
五五頁 九行 フリー・メーソンの後に、を  
六二頁一〇行 仮空 架空の誤  
六四頁 五、六行 一色 一色のルビ  
七三頁 左から三行目 歎 歎の誤  
七四頁一〇行 第三者の上に、注番号二を加う  
七七頁 左から四行目 *antworten ; antworten* とあるはいずれも *antworten* の誤  
七八頁 ヘルデンはヘルデルの誤  
八〇頁 (Sekte) は (Sekte) の誤

附記 訳注にあたって Lennhof, Die Freimaurer は非常に参考になった。多年に亘り、この貴重な書物をお貸し下された早稲田大学

西洋史学部の十河祐貞先生にお詫びと同時に深甚の謝意を表する次第です。訳者。